

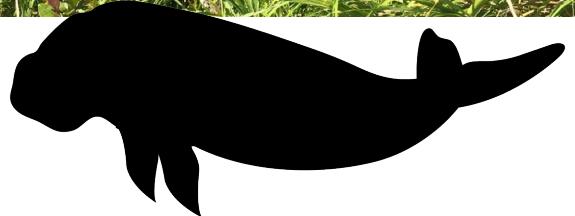
# 辺野古の海の生物多様性を 伝えるシンポジウム

2015年9月13日（日） 13:30～17:00

法政大学市ヶ谷キャンパス（外濠校舎306号室）

後援：法政大学文学部地理学科

※この活動は、公益財団法人自然保護助成金・第25期（2014年度）プロ・ナチュラ・ファンド助成によって実施しています。



自然のちからで、明日をひらく。

日本自然保護協会

THE NATURE CONSERVATION SOCIETY OF JAPAN



「辺野古を巡る問題」は連日のようにニュース番組で報道され、日本の国内問題として議論がなされています。これらで言われているように、沖縄県辺野古への普天間飛行場代替施設事業には多くの問題があるのが現実です。

しかし辺野古を埋め立てることによって何が失われるのかという事態の深刻さについてはまだまだ広く知られていません。

「辺野古・大浦湾とは、いったいどのような場所なのか」

「なぜ、辺野古の海を埋め立てることが問題なのか」

様々なバックグラウンドをもつ専門家が、それぞれの観点からこれらの問題を分析し、また、この海域を10年以上調査してきた日本自然保護協会が自然保護にフォーカスをあて、辺野古の海の埋め立てがもたらす意味について皆さんと一緒に考えます。

〈プログラム〉

■挨拶：亀山 章（日本自然保護協会理事長）

■Ⅰ部：

「誰がジュゴンを語るのか～ジュゴンと人との関わり」

吉川秀樹（沖縄・生物多様性市民ネットワーク）

「沿岸地域自然保護環境の保護における場の多様性の意義～沖縄島・辺野古大浦湾を例に～」

中井達郎（国士館大学）

「市民参加調査から見えてきた辺野古・大浦湾の自然環境の重要性」

吉田正人（IUCN-J会長、筑波大学大学院）

「世界に誇る辺野古・大浦湾のサンゴ礁の海」

安部真理子（日本自然保護協会）

（休憩）

■Ⅱ部：パネルディスカッション

コーディネーター：吉田正人、吉川秀樹、中井達郎、安部真理子、まさのあつこ



<プロフィール>

**吉川秀樹** (よしかわひでき)

沖縄・生物多様性市民ネットワーク共同代表。ジュゴン保護キャンペーンセンター国際担当。琉球大学、名桜大学、沖縄県立芸術大学大学院で非常勤講師を務める。専門は文化人類学、応用人類学。名護市出身。アメリカとカナダの大学、大学院で人類学を学ぶ。北タイでフィールドワークを行い、国家、民族、開発の関係について研究する。1999年に沖縄に戻り、米軍基地と環境の問題に「市民」の立場から取り組み始め、「市民社会」の実践と研究を目指す。2013年に沖縄県が策定した沖縄県生物多様性地域戦略では NGO 代表のひとりとして策定委員会委員を務めた。



**中井達郎** (なかい たつお)

国士館大学・立正大学非常勤講師・博士(理学)。1955年東京都生まれ。東京都立大学理学研究科博士課程満期退学、博士(理学)。(財)日本自然保護協会勤務(研究部長などを歴任)の後、2003年より国士館大学などで非常勤講師を務める傍ら、NGO・NPOや行政、地域などと自然環境保全活動を行う。専門はサンゴ礁地域の地形学・地理学であるが、保全活動は海や島に限らず、河川や溪流、山地にまで及ぶ。日本サンゴ礁学会評議員。日本自然保護協会参与。サンゴ礁地形の研究者らと辺野古・大浦湾の海底地形を分析し、辺野古・大浦湾の生物多様性の理由を研究してきた。



**吉田正人** (よしだ まさひと)

筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻教授。専門は保全生態学。IUCN国際自然保護連合日本委員会会長・日本自然保護協会専務理事。大学卒業後は、20年以上に亘り、日本自然保護協会で勤務。主に、環境教育、全国各地の自然保護問題の解決、世界遺産条約などの国際条約の推進に携った。著書に、「生態学から見た野生生物の保護と法律」(共著、講談社、2003年)、「自然保護—その生態学と社会学」(地人書館、2007年)、「生態学から見た保護地域とその生物多様性保全」(共著、講談社、2008年)、「世界自然遺産と生物多様性保全」(地人書館、2012年)など。海草の研究者とともに、オーストラリアで実施されていた市民参加型海草調査を日本に導入し、辺野古の海草の変遷を見続けてきた。



**安部真理子** (あべ まりこ)

日本自然保護協会 保護・研究部。大学、大学院にて生物学と生化学を専攻し、WWF ジャパンに8年間勤務。オーストラリアの詹姆ズクック大学院修士課程に留学し、続いて琉球大学博士課程にてアザミサンゴの多様性に関する研究で博士号(理学)を取得。1997年に日本国内でのリーフチェック立ち上げに関わった一人であり、以来コーディネーターをつとめている。沖縄リーフチェック研究会会長、日本サンゴ礁学会評議員、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会理事。現職、日本自然保護協会では2010年4月から沖縄の問題や日本の沿岸の問題を担当している。



**まさのあつこ**

ジャーナリスト。1993～1994年にラテン諸国放浪中に日本社会の脆弱さに目を向け、帰国後に奮起。衆議院議員の政策担当秘書等を経て、東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了。博士(工学)。著書に「四大公害病-水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市公害」(中公新書、2013年)、「水資源開発促進法 立法と公共事業」(筑地書館、2012年)など。



**志村智子** (しむらともこ)

公益財団法人日本自然保護協会 自然保護部部長。学生時代に、知床の保護問題、NACS-J 自然観察指導員などに関わり始め、世界遺産になる前の白神山地の保護活動にもボランティアとして参加。1986年、森林保護・環境教育業務補助としてスタッフに。『自然保護』編集長時代には、地球サミット(1992・ブラジル)に NGO として参加・取材。環境教育担当、管理部部長などを経て、現職。





## 誰がジュゴンを語るのか～ジュゴンと人との関わり～

吉川秀樹

沖縄本島を生息地の北限とする海洋哺乳類ジュゴンは、日本の天然記念物であり、絶滅危惧種である。国際的に絶滅危惧種（IUCN VU.）に指定されている。そして沖縄のジュゴンは、生息地である辺野古・大浦湾で進められる米軍基地建設計画と関連して、15年以上に渡り国内外から大きな注目を集めてきた。この発表では、「誰がジュゴンを語るのか」「どのように語っているのか」という問い合わせを通して、沖縄におけるジュゴンと人々の関わりとその変遷を示していく。そして、沖縄の海にジュゴンが生息し続けることの重要性と、そのためには科学的知見に基づいた対応と、基地建設計画の撤回が不可であることを訴える。

ジュゴンは沿岸に育つ海草を食べ沿岸域で生息するが、その行動・移動範囲が広いことも報告されている。それゆえ沖縄のジュゴンは、陸上に住む人間にとて、常に身近な存在でありながら、人々と海と、そして海の彼方にある世界をつなぐ生き物である。

ジュゴンは、沖縄の神話や民話の世界に登場し、人類創世に関わり、津波の到来を伝える神の使いである。また琉球王朝時代に編纂された歌謡集『おもろさうし』では、狩猟の対象としても描かれている。さらに八重山諸島の新城島では、獲ったジュゴンを塩漬けにして琉球王朝に人頭税として納付していた。このようなジュゴンの歴史的文化的な要素は、現在でも地域の祭祀・儀礼において見ることができる。

しかし1890年代までは「奄美以南では希ではない」とされたジュゴンも、個体数が減少し、1930年代には危機的状況をむかえる。先の沖縄戦がジュゴンに与えた影響も計り知れない。そして1955年、沖縄のジュゴンは米軍統治下の琉球政府において法的に保護される「天然記念物」に指定され、1972年の日本復帰を経て日本の天然記念物となっていく。

その後暫くの間、沖縄のジュゴンは、危機的状況にあるにも関わらず、一部の研究者や行政機関を除き、人々からは遠い存在となっていた。それを大きく変えたのは、日米両政府がSACO合意で辺野古での米軍新基地建設を提案し、それに伴う那覇防衛施設局（現沖縄防衛局）の環境調査（1997）により一頭のジュゴンが辺野古沖で確認されたことだった。

辺野古沖での確認後、沖縄のジュゴンは、様々な人々によって、様々な形で語られていく。防衛省や環境省や沖縄県。環境NGOや研究者。平和運動家や芸術家。そして沖縄の人々の日常会話にも登場し、米国の裁判所までもが沖縄のジュゴンを語る。沖縄の豊かな自然の象徴として、絶滅危惧種・天然記念物として保護されるべき生物種としてのジュゴン。基地建設反対運動の象徴として、平和への希求の象徴としてのジュゴン。そしてこの新たな語りと運動しながら、これまでのジュゴンの歴史的文化的価値が再度語られていく。

勿論、ジュゴンの語りは、米軍基地建設計画に対する賛否の立場により異なっている。しかし誰一人、沖縄のジュゴンを絶滅させていいとは語っていない。またその重層化する歴史的文化的価値をないがしろにしていいとは語っていない。誰もが語っているのは「ジュゴンは守られるべきだ」ということだ。

今必要なものは、ジュゴンが沖縄の海に生息することの重要性を認識し、科学的根拠を持って、ジュゴン保護への取り組みと基地建設の問題について語れる専門家である。そしてそのような専門家が「語れる」場所を私たちが作ることである。



# 辺野古・大浦地域における“場”的多様性の重要性 ～地理学からの視点～

中井達郎 (国土館大学)

「生物多様性 (Bio Diversity)」は近年、自然保護においてきわめて重要なキーワードのひとつとなっている。それは、遺伝子レベル・生物種レベル・生態系レベルの三つのレベルの多様性から成り立つと説明されている。しかし、往々にして種レベル以下の多様性で認識される傾向が強い。さらには、生態系レベルの多様性が論じられる際も、生物群集を中心に議論されることが多く、生物群集を取り囲む大気環境、地形地質環境、水環境などからなる無機的自然は十分に検討されることは少ない。本来、生態系は“無機自然系”と“生物群集系”的全体を対象とする。そしてその間の関係性を把握することによって特定地域の生態系の特性が明らかになる。

辺野古・大浦の沿岸・浅海域では、非常に多くの種類の生物が生息する、いわゆる生物種レベルの多様性が非常に高い場所だということがわかってきており。そしてその要因は、サンゴ礁、海草藻場、マングローブ・干潟、水深の深いところにある泥地（深場の泥地）といったタイプの異なった多様な生息場が、この狭い海域にひとつの組み合わせとなって存在するためだと考えられる。つまり生物にとっての“場”的多様性が高いのである。辺野古・大浦湾の海が、沖縄の海の中でも非常にユニークであり保護・保全の必要性が高い理由はこの点にある。

図に示したように、この海域には、波あたりが強く、塩分濃度が高く、濁りが小さいという外洋的環境から、その逆の特徴をもつ無機自然からなる内湾的自然が存在する。底質はこのような環境の勾配に対応して分布する。これは粒径分布のみならず、有機物の含有量などにおいても外洋から内湾への変化が見られる。そしてそこに生息・生育する生物（特に底生生物類）はそのような無機的自然の多様性に対応して分布する。たとえば、貝類の生息は、生息場所の底質、ひいては波浪環境と深い関係がある。この観点から「外洋性の貝類」「中間的な貝類」「内湾性の貝類」の3タイプで区分が可能である。また造礁サンゴ類も貝類と同じように、外洋から内湾までの環境の変化に対応して分かれている。

さらにこのような“場”的多様性は、そこに棲む生物だけでなく、この地域の人々にとっても価値を持ってきた。食糧などとして利用されてきた多様な生物をはぐくむ多様な“場”的恩恵を認識してきた。サンゴ礁の礁原・礁池（イノウ）は“海の畠”と呼ばれ価値づけられてきた。またその多様性は観光資源と

	弱		強		外洋		
底質	泥	シルト	細かい砂	粗い砂	れき／岩礁		
“場”生息場	マングローブ・干潟		海草藻場	サンゴ礁			
貝類	シブヌリヨフバイ、カゲロウヨフバイ、クチミゾヨフバイ、オキナワマツムシ、クルミガイの仲間、ニッコウガイ類など	スイショウガイ・ウシイロバイなど	マドモチミニナ・カノコガイ類・オオミミガイ類など	イモガイ類やザルガレイ類など	クジャクガイ・ミダレハネガイ等	トクサハイ・モクメダマ・ジュドウマクタカラガイ類など	
	内湾性の貝類		中間的環境の貝類			外洋性の貝類	
造礁サンゴ類	ユビエダハマサンゴ群集			塊状ハマサンゴ	アオサンゴ群集	ハマサンゴの丘	

図 沖縄島・辺野古・大浦沿岸地域における“場”的多様性（中井ほか（2009）を一部改変）



して価値も生む。その一方で、このような“場”に対して別の価値付けをする人々がいることも事実である。浅所を埋め立てに適した場所としてとらえ、深所を船舶の接岸に有効ととらえる。前者は“場”的多様性によってもたらされるものであるのに対し、後者は“場”的多様性の喪失させるものである。自然保護問題は、このように“場”的価値付けが立場によって異なることに起因するとも考えられる。問題の解決や持続可能な自然利用を考えるとき、生物学的側面の多様性だけではなく、無機的自然の多様性や人間にとつての多様性を含めて議論が必要となる。また自然保護問題は、現実にある具体的地域の問題である。これらのことすべてを内包する“場”的多様性をいう見方が有効となろう。この多様性は次世代以降に引き継がれるべきものであり、持続可能な自然利用を担保する。



## 市民調査から見えてきた 辺野古・大浦湾の自然環境の重要性

公益財団法人日本自然保護協会専務理事・筑波大学教授 吉田正人

公益財団法人日本自然保護協会（NACSJ）は、2000年にヨルダンのアンマンで開催された国際自然保護連合（IUCN）の世界自然保護会議（WCC）に参加し、沖縄のヤンバルクイナ、ノグチゲラ、ヤンバルクイナ保護の決議提案に加わったのを機会に、それまで取り組んできたやんばるの森の保護に加えて、辺野古・大浦湾の保護に取り組んできた。

私は2002年からは辺野古周辺海域における沖縄の海草藻場の市民参加調査、沖縄ジャングサウォッチの立ち上げに参加した。その結果は、日本自然保護協会報告書第97号、第100号のモニタリング調査報告書にまとめられている。一言で言えば、辺野古の海草藻場は、沖縄島において最大の海草藻場であるばかりでなく、海草の多様性が高く、安定しているため、周辺の海草藻場に対して種子の供給源の役割を果たしていることも示唆された。また、海草藻場の調査マニュアルは、「ジャングサウォッチハンドブック+うみくさシート」として活用してきた。

またNACSJは、WWFジャパン、沖縄リーフチェック研究会、国士館大学地理学教室、じゅごんの里、ダイビングチームすなっくスナフキンとの合同調査で、調査範囲を大浦湾に拡大し、海草藻場だけではなく、アオサンゴ、マングローブ、深場の砂泥地などの重要性を調査し、その成果を「辺野古・大浦湾アオサンゴの海 生物多様性が豊かな理由 -合同調査でわかったこと-」にとりまとめた。その結果、大浦湾では次々と生物の新種が見つかり、ジュゴンの食み跡であるジュゴントレンチも数多く見つかった。調査結果をもとにNACSJは、普天間飛行場代替施設移設問題に意見を述べるとともに、アオサンゴの天然記念物指定などの提言を行ってきた。

辺野古・大浦湾における市民調査は、サンゴやマングローブに比べて注目されることの少ない海草藻場に対する市民の関心を高めるとともに、市民調査の結果をジュゴンの生息地の保護に役立てるという社会的役割も果たしてきた。一方で、オーストラリアのシーグラス・ウォッチのように、歩いて調査できる潮間帯ではなく、傭船を必要とする海の調査を継続することの難しさもあった。普天間飛行場移設計画は非常に厳しい局面にあるが、これまでの市民調査が辺野古・大浦湾の自然環境の保全につながることを願ってやまない



# 世界に誇る辺野古・大浦湾のサンゴ礁の海

安部真理子 日本自然保護協会 自然保護室主任

## 1. はじめに

沖縄島・名護市東海岸の辺野古・大浦湾にはサンゴ礁、海草藻場、マングローブ、干潟、深場の泥地といったタイプの異なる環境と地形が存在し、生物多様性を支えている。国の天然記念物であり絶滅危惧種絶滅危惧 IA類（環境省）であるジュゴンと餌場である海草藻場をはじめとし、2007年にその存在が発見されたチリビシのアオサンゴ群集、長島の洞窟など、この海域全域で生物多様性が高く、複数の専門家（黒住ら 2003、藤田ら 2009）が述べているように、今後も新種や日本初記録、ユニークな生活史を持つ生物が多発見される可能性が高いことが示唆されている。

## 2. 環境アセスメント（環境影響評価）の問題

本事業に伴う環境アセスメントは、2012年2月に仲井眞沖縄県知事（当時）が「環境保全は不可能」と断じたほど、科学的に大きな問題があり、住民参加や情報の透明性という観点から多くの問題が存在した。しかしながら2013年12月に仲井眞沖縄県知事（当時）の手により、正反対の判断が下され、公有水面埋立申請が承認された。

## 3. 環境アセスメント（環境影響評価）の対象とされなかった埋立土砂

環境アセスメントの段階では埋立土砂の調達先については示されていなかった。公有水面埋立手続きの段階になり、初めて埋立土砂の具体的な調達先が明らかにされた。本来は環境アセスメントのプロセスを経なければならない大きな環境の変化に相当する。

160ヘクタールの埋立事業に2,100万立方メートルの土砂が使用される。この量は10トントラック300万台以上の土砂に相当する。次の4点が生物学上の問題となる。a) 埋立土砂調達予定先の環境への影響、b) 土砂運搬船とジュゴンとの衝突の可能性、c) 海砂採取により嘉陽の海草藻場への影響が生じる可能性、d) 埋立土砂に伴う埋立地への外来種の移入。埋立土砂以外にもオスプレイの配備など多くの項目が環境アセスメントを逃れている。

## 4. 情報の隠ぺい・後出し、有識者からなる各種委員会

環境アセスメントの期間および公有水面埋立手続き、埋立承認後のいずれの段階においても、環境に大きな影響を与える工事について、情報の隠ぺいおよび後出しが行われている。また本計画では各段階において、専門家からなる委員会が環境保全上の問題が残るまま事業進捗にお墨付きを与えるという役割を果たしている。市民や外部の専門家などの正確な情報へのアクセスや意見の計画への反映が困難な状況が続いている。

## 5. 環境アセスメント後に判明した科学的事実の軽視

昨年5～7月に自然保護団体が行ったジュゴンの食痕調査により、ジュゴンがこれまで以上に高い頻度で埋立予定地内および周辺を餌場として利用していたことが解明された。このようにジュゴンが採餌域を拡大し、大浦湾の埋め立て予定地内および周辺を利用することは、環境アセスメントが行われた時点では予測されていなかったことである。しかしながら事業者は事業の中止および変更は行われていない。その他の環境アセスメント終了後に判明した科学的事実（例：新種発見）についても対策が示されていない。



## 6. 環境保全措置の問題点

環境影響評価書（補正後）には環境保全措置が書かれているが、公有水面埋立承認が下りてから埋立工事が開始されるまでの「調査期間」には、その保全措置が適用されない。着工前の調査の時点でも、厳重な保全措置が取られるべきである。つまり着工前に影響を与える行為をしながら、事後に保全措置を取っても意味がない。

## 7. モニタリング調査

日本自然保護協会では、2014年夏より工事や作業に伴う周辺環境への影響を見るために、サンゴ礁の健康度、水質、ジュゴンの食痕の調査を行っている（公益財団法人自然保護助成金・第25期（2014年度）プロ・ナトゥーラ・ファンド助成によって実施）。現在のところ、水質とサンゴ礁の健康度には大きな変化はない。ジュゴンの食痕については2014年7月を最後に臨時制限区域内での調査の実施が不可能となり、また臨時制限区域外の2カ所についても2014年8月以降は利用の記録が見つかっていない。また沖縄防衛局の調査からも9月上旬を最後にジュゴンが来ていないとされている。2014年5～7月に頻繁に利用記録があったジュゴンが本海域からしばらく遠ざかっていたということが推測できる。しかしながら、今年4月と5月に、臨時制限区域から距離のあるチリビシのアオサンゴ群集の下部に位置するトゲウミヒルモ藻場においてジュゴンの食痕が確認できた。海草の季節の終了に伴い、8月現在、ジュゴンの食痕は再び確認ができなくなったが、ジュゴンがこの海域を再び利用する可能性は高いと思われる。

## 8. 長島の洞窟

長島は辺野古沖にある地域住民の憩い場である。この島にある洞窟が、学術的に大変価値の高い鍾乳洞であることが2014年7月に判明した。洞窟の入り口の部分の高さは50cm程度であり、奥行きは真横に10数メートル続き、縦方向の穴につながる。このように石筍にサンゴ礫が付着して成長した鍾乳石は、日本での報告例はなく珍しい。現在も形成中の非常に新しいものであり、形成過程がはっきりわかるところから詳しい調査を実施すべきである。日本自然保護協会は、調査を行うために長島への上陸許可を管理者である沖縄防衛局に求めているが、現在まで許可が下りない。

## 9. おわりに

辺野古・大浦湾はIUCNが3度にわたる勧告を出しているほどの貴重な自然であり、沖縄のジュゴン個体のジュゴンのなかで最も北限に位置する重要なものである。また多くの新種や貴重種を十分に調査することなく埋め立てに踏み切り、外来種が入る可能性のある埋立土砂を本土や他の島々から持ち込むことが、自然環境に大きな影響を与えることは明白である。日本が議長国をつとめた2010年に採択された愛知ターゲット目標9「外来種混入の防止」、目標10「脆弱な生態系の保全」、目標12「絶滅危惧種の絶滅・減少を防止する」を守れない事業を進めることは国際的にも許されないことである。

### ◆日本自然保護協会 2014年7月9日記者会見資料

[http://www.nacsj.or.jp/katsudo/henoko/pdf/20140709henokokaikeisiryo\\_0715kaitei.pdf](http://www.nacsj.or.jp/katsudo/henoko/pdf/20140709henokokaikeisiryo_0715kaitei.pdf)

### ◆「普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評価書（補正後）」への意見

<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/henoko/2013/02/post-59.html>

### ◆「普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評価書」への意見書・理由書

<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/henoko/2012/02/7000.html>



◆「普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評価準備書」に対する環境保全の見地からの意見書

<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/henoko/2009/05/post-29.html>

◆普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響追加方法書に対する意見書

<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/henoko/2008/02/post-15.html>

◆普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評価方法書に対する意見書

<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/henoko/2007/09/post-17.html>

※その他の普天間飛行場代替施設建設事業に関する意見書・要望書はこちらからご覧いただけます

<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/henoko/>





♪本を買って自然保護♪ NACS-J 会員 10%OFF

## 書籍のご案内

沖縄島辺野古における海草藻場モニタリング調査	1,080 円
「ジャングサウォッチ」10年まとめ (2013年)	
ジャングサウォッチハンドブック&識別シート	1,296 円
沖縄島北部東海岸における	
海草藻場モニタリング調査報告書 (2007年)	2,160 円
自然しらべ 2012 貝がらさがし！報告書	1,000 円
いその自然かんさつ	400 円



このほかにも、日本自然保護協会が発行する報告書、資料集、会報バックナンバーが多数ございます。

### <ご購入方法>

- インターネットで
- しぜんもん SHOP & 寄付 <https://nacsj.net/store/>  
会報『自然保護』掲載のクーポンコードで会員の方は割引価格でご購入いただけます。お支払はクレジットカード決済のみ。
  - しぜんもん Yahoo!店 <http://store.shopping.yahoo.co.jp/shizenmon/>
  - amazon <http://www.amazon.co.jp/shops/A14RZUGPJM10E5>  
会員割引はございません。お支払はクレジットカード決済のみ。
  - 楽天市場・ウェブの書斎 <http://item.rakuten.co.jp/shosai/c/0000000650/>  
古い刊行物の復刻版が、オンデマンド印刷により 1 冊からご購入いただけます。会員割引はございません。お支払はクレジットカード決済または代金引換。
- Eメール・FAX・郵便で
- 会員の方は割引価格でご購入いただけます。お支払は、郵便振替または銀行振込（送金手数料はご負担いただきます）。品名、冊数、お名前、〒・ご住所、TEL、会員番号を明記してご注文ください。

会員募集中！

### ○日本自然保護協会は

1949 年に尾瀬が原を水没させる発電ダム計画への反対運動のため設立した「尾瀬保存期成同盟」が前身の日本生まれの NGO です。1951 年に日本自然保護協会に発展的に改組。今年で創立 64 周年を迎えました。1960 年に日本の自然保護団体として初の財団法人、IUCN-J 日本委員会の事務局を担当。2011 年公益財団法人認定。理事長・亀山章、会員数約 24,000 人。NACS-J (ナックス・ジェイ) は英名の略称です。

### ○会員になると、

辺野古をはじめとする全国の自然保護問題や自然とくらすたのしい情報満載の、会報『自然保護』(隔月発行)をお届けします。年会費 5000 円。いつでどなたでも会員になれます。

## 公益財団法人 日本自然保護協会

〒104-0033 東京都中央区新川 1-16-10 ミトヨビル 2F

Tel.03-3553-4101 fax.03-3553-0139 email: [nature@nacsj.or.jp](mailto:nature@nacsj.or.jp)